

## 日本における新旧保守論壇の対中国、韓国、北朝鮮観 —保守主義とヘイトスピーチ—

宮城佑輔（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）

2000年代以降、東アジア諸国では草の根的な排外主義運動が相次いで発生した。日本においては「在日特権を許さない市民の会」（以下「在特会」）等の保守系団体によるヘイトスピーチが政治問題化した。

こうした中、出版物の表現の過激化も指摘されている。例えば、2014年に活動を開始した「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」は、「偏狭なナショナリズム」に基づき他国を批判する近年の出版物を「ヘイト本」と総称し、問題化している。このように、保守論壇や運動に対する批判は数多く見られる。

しかし、あからさまな差別的表現は別として、他国の外交、政治戦略への批判自体は表現の自由のもと容認されるべきであるし、安易なラベリングは多様な保守論壇内の微妙な差異を捨象しかねない。例えば、近年の「新しい保守論壇」がヘイトスピーチを「有効な」言説手段とみなす一方、既存保守論壇の多くはヘイトスピーチの使用を批判しているなど、保守論壇内においても方法論上の濃淡がみられるのである。こうした保守論壇の多様性にまで踏み込んだ分析は、樋口直人の業績を除き、ほとんど見られない。したがって、本研究では新旧保守論壇のトピックを詳細に比較検討し、その差異と過激化の発生要因を分析したい。

具体的な研究方法としては、保守論壇に関する既存の言説を検討した後、既存保守論壇として主に『正論』（産業経済新聞社）、新しい保守論壇として主に『JAPANISM』（青林堂）や在特会を取り上げ、それぞれの近年の対中国、韓国、北朝鮮言説を分類、比較する。それにより、①新旧保守論壇における差異の諸相、②ラディカリズムに傾斜しがちな「新しい保守論壇」のトピックが、伝統と格式のある既存保守論壇に先行する「逆転現象」の内容別詳細、③新旧保守の差異を生んだマクロ要因（反共レジームの衰退）、メゾ要因（運動過程要因）について明らかにしたい。